

# ■湘北地区「防災“も”まちづくり研究所」設立！

今年度のワークショップでは、中学生のみなさんと大人の方が一緒になって考えるための組織として、東京大学加藤研究室附属「湘北地区防災“も”まちづくり研究所」を設立しました。参加者のみなさんは、4つの研究室に分かれて、各テーマに沿ってアイデアを出していただきます。今回は認定式を行い、参加者のみなさんに研究員としての任命書が所長の加藤先生から手渡されました。



研究員に授与された「任命書」

## ＜4つの研究室のテーマ＞

\*各研究室の名前は、次回までに参加者に考えてもらいます。



認定式の様子

## ■参加者の声

※アンケートでいただいた主なご意見です。

- 火事の体験で、少し遠くにいても体が温かくなり、近づくともっと熱くなり、本当の火事を考えると、火には気をつけようと思いました。
- 怪我人を運ぶ担架の作り方が学べて良かったです。
- 体育館は安全だと思っていたけど、調べたら結構危険でした。身の回りの危険をしっかり理解したいと思いました。
- 今回の体験で、火災が起こった時の対処法などが学べました。
- 普段安全だと思っていた所も、実は危険だったという事を知り、日常生活でも気をつけようと思いました。



## ■ワークショップの今後の予定 まだ参加されていない方のご参加も、お待ちしております！

回数	日付	時間	概要
第1回 (終了)	平成28年 10月23日	9:30~ 12:00 (150分)	加藤先生からの講演/体験学習 湘北地区防災“も”まちづくり研究所の設立式
第2回	平成28年 12月3日	9:30~ 12:30 (180分)	湘北地区の市街地状況/ 防災“も”まち歩き/まち歩きマップをつくろう
第3回	平成29年 1月21日	9:30~ 12:00 (150分)	地域のできるまちづくり活動について、検討しよう！
第4回	平成29年 2月25日	9:30~ 12:00 (150分)	アクションプログラムをつくってみよう！ 防災まちづくりワークショップのまとめ

自助(個人)・共助(地域)の視点から防災まちづくりについて考えてみませんか？

# 湘北地区「防災“も”まちづくりワークショップ」ニュース

Vol.1



## 「防災“も”まちづくりワークショップ」(全4回開催予定)スタート！

茅ヶ崎市では、東京大学生産技術研究所の加藤孝明准教授のご協力のもと、平成21年度から「防災都市づくりワークショップ」(今年度から「防災“も”まちづくりワークショップ」に改称)を実施し、地域のみなさんと一緒に災害に強い都市づくりを進めております。

今年度は、湘北地区のみなさんと一緒に、全4回のワークショップを実施してまいります。ワークショップでは、鶴が台中学校の生徒の方々に多く参加していただき、湘北地区のまちづくりについて考えます。

1回目の今回は、災害時に起こり得ることや、そのときに必要となる対応がどのようなものなのか等を体験し、学びました。

## ～第1回 湘北地区「防災“も”まちづくりワークショップ」で行ったこと～

### ＜はじめに＞

あいさつ 湘北地区自治会連合会  
沓澤会長

### プログラムの説明

茅ヶ崎市 都市部 都市政策課

### ＜レクチャー＞

「地域から進める防災“も”まちづくり」  
講演 東京大学 生産技術研究所  
加藤 孝明 准教授

### ＜体験学習＞

「災害時対応をせよ！」

### ＜発表&講評＞

体験学習の感想(参加者より)  
加藤先生からのコメント

### ＜湘北地区防災“も”まちづくり研究所の設立式＞

### ＜閉会＞

次回予告

## ■湘北地区自治会連合会 沓澤会長のごあいさつ



湘北地区自治会連合会  
沓澤会長

日頃は、地域のことに色々ご協力いただきましてありがとうございます。

今回、このようなワークショップに参加するのは初めてですが、このように中学生にもたくさん参加いただいて防災について考える機会をいただき、大変うれしく思っています。

この機会を生かして、地域のことを知る、自分が住んでいるまちについて学ぶ、そして防災に関して互いに協力し合えるようになればと思っています。1年間、よろしく願いいたします。

# ■地域から進める防災“も”まちづくり（加藤先生からの講演）

## 人間の本质を理解する

たばこを吸う人は、肺に害があると知りながら、どこかで自分だけは大丈夫と思っています。同じように、人は「都市は安全」という前提でものごとを考えてしまいます。このように、人間は根拠なく、都合よく考える性質があり、災害の危険性をどれだけ伝えても、なかなか具体的な行動につながらないのが現状です。



講演の様子

## 自助・共助・公助のあるべき姿を理解する

持続的な自助・共助の実現のためには、自分の地域で起こりえる被災状況を理解すること、お互い何をどこまでやるのか役割分担を理解することが大切です。また、公助との役割分担では、互いにどこまで責任をもって取り組めるかを合意しておくことが重要になります。

## 災害のイメージを高める

過去の災害から学びすぎることは良くありません。災害発生時の季節や時間など、条件が変われば違う被災状況になりえます。そのため、過去の災害を、今の時代・自分の地域に即したイメージに翻訳する作業が必要です。

防災まちづくりを進めるためには・・・

## 「防災“も”まちづくり」の「も」が大切

防災のことだけ考えていても、なかなか防災の取組は進みません。それよりも、防災も含めて地域のいろいろなことを学んでいくことが大切で、地域での発見や学び、地域での人との結びつきの広がり等が結果として防災に結びついていきます。

## 秋田名物の「なまはげ」が災害時の助け合いにも役に立つ！？

「なまはげ」は、怖い風貌で「悪い子はいないか」と言って子供を脅かしに来て、脅かされた子供は「もう二度と絶対悪いことをしません」と言っている子になる、という秋田県の年中行事です。この「なまはげ」は風貌だけが怖いのではなく、家族しか知らない子供の悪さをちゃんと知っているから怖いのです。実は、「なまはげ」の中に入る人は年に1回、各家庭を訪問し、情報を仕入れています。そして、この中に入る人というのが、地域の未婚の男性、つまり、災害時に地域で活躍できる人なのです。このように「なまはげ」という地域の風習を通じて、年に一度各家庭の生活状況を確認でき、いざというときの「災害時要援護者」対策にもなり得るのではないかと、非常によくできた仕組みと言えます。



男鹿市観光協会

地域防災の取り組みというものが、地域の常識になり、そして、それが100年後、200年後ぐらいには、この「なまはげ」のような形で「文化」として地域に定着していけるのではないかと思います。



### ～加藤先生の略歴～

- ・東京大学生産技術研究所都市基盤安全工学国際研究センター 准教授
- ・専門分野は、都市計画、まちづくり、地域安全システム学
- 《主な社会活動》
- ・地域安全学会：理事／自治体危機管理学会：理事／地区防災計画学会：理事／災害復興学会：理事、日本都市計画家協会：理事・震災復興支援タスクフォース
- ・都市計画学会：東日本大震災復興支援特別研究委員会防災部会委員（-2014）／日本建築学会：地域防災・復興小委員会主査（-2014）、広域巨大災害に備える特別委員会（-2015）、他多数
- ・内閣官房：都市再生の推進に係る有識者ボード防災ワーキング
- ・東京都、川崎市、神奈川県、名古屋市他 自治体の委員会等 他多数



# ■体験学習「災害時対応をせよ！」

体験学習は、鶴が台中学校の校内を湘北地区に見立てて、湘北地区に災害が発生して、様々な被害が発生しているという設定の下、4つの班毎に鶴が台中学校の校内を巡り、合計4つのミッションに取り組みました。この体験学習を通じて、参加者の皆さんは、災害のこわさや、その時の対応として「消火」「安全確認」「避難」「救助」などの行動について体験しました。



## 《避難所の状況を確認せよ！》

学校の体育館は、指定の避難所になっていますが、地震が起きたら、どんな危険があって、どんな被害が起きそうか、体育館の周りを歩いて確認しました。

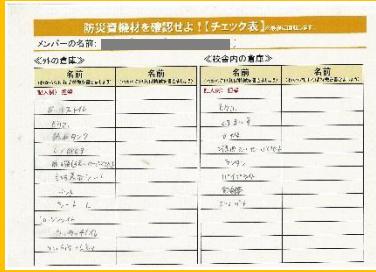
参加者が作成したチェックリスト



## 《防災資機材を確認せよ！》

体育館横と校舎南棟4階には、防災倉庫があり、その中に何があるのかリストアップしてみました。

参加者が作成したチェックリスト



中学校の中に、こんなものがあったんだ！

## 《消火活動せよ！》

火災現場で、ふくしゃ熱の熱さや煙のこわさを体感し、炎めがけて訓練用の水消火器で初期消火活動をしました。



近くで、ふくしゃ熱や煙を体感想像以上に熱い！

水消火器を噴射！うまく消火できるかな？

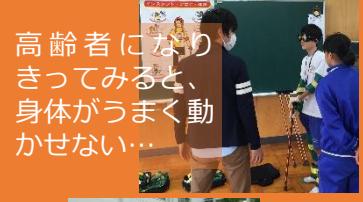


## 《安否確認せよ！》

団地に見立てた校舎南棟を回り、高齢者の安否確認を行い、高齢者体験キットを装着した参加者を広場まで避難誘導しました。また、1階からは人形を乗せた担架や車いすによる救助も行い、救助救護の大変さを体験しました。



車いすで救助！段差の移動は一苦労だ…



高齢者になりきってみると、身体がうまく動かせない…



担架による救助！

## ■第1回ワークショップの振り返り（加藤先生）

百聞は一見にしかずということで、今回は「災害時の対応」に着目した体験学習を行いました。小さなたき火の体験では、「火は予想以上に熱い」ことが分かったと思いますが、このたき火が実際の2階建て住宅（高さ6m）の火災だと仮定してみましよう。家の前の道路は、写真のように炎が届き、とても熱くなります。このように体験を通して、実際の災害ではどうなるのか？と想像してみることが非常に重要だと思います。日々の情報や経験に基づく日常の延長で防災を考えるのではなく、疑似体験を通してゼロベースで災害時の状況を考え直していくことが重要です。ご家族と災害時にどうなるのかを話し合ってみるのもいいと思います。



住宅街の道路は、4m～6m程度です。参考に、同じ縮尺で人が表示されています。さて、実際にこの場所にいたら、助かるのでしょうか。